

Title	14世紀後半～15世紀前半のブルゴス市の都市官職： アルフォソン11世紀の『改革勅令』とカストロ伯の 『仲裁判決』を中心に
Author(s)	大内, 一
Citation	大阪外国語大学論集. 1 p.241-p.264
Issue Date	1990-01-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79465
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

14世紀後半～15世紀前半のブルゴス市の都市官職

——アルフォンソ11世の『改革勅令』と

カストロ伯の『仲裁判決』を中心に——

大 内 一

Los cargos concejiles de la ciudad de Burgos de entre la segunda mitad del
siglo XIV y la primera del siglo XV através de los dos documentos,
“La Ordenanza de Alfonso XI de 1345” y “La Sentencia
Arbitral del Conde de Castro de 1426”

Hajime OUCHI

0. は じ め に

『……カスティーリャの首都であり、我が宮廷の座する高貴なるブルゴス市において、当市の諸問題を検討し命令を下す権限を有し、以前に市会が処理し命じていた諸事を会議して処理するところの紳士なる市民が設置されることは国王たる余への奉仕になると判断し、……（中略）……以下に挙げる人物に市会の諸問題を委託するよう命ず。……（中略）……ここに挙げし16名の紳士なる市民は、余が当市にて任命せしアルカルデ、メリーノおよびエスクリバーノ・マヨールと共に、今後……（中略）……サンタ・マリア橋の塔もしくはサンタ・マリア教会に会して、当市の市会の諸問題を検討し、国王たる余への奉仕となり、また当市ならびにその臣下、属村と属域の利益と保護になると思われる全ての事柄を議決すること、（中略）また、従来より市会が行い命令してきた全ての事柄を行い命令する権限を持つこと、さらに、この者達が行うことは市会が一致して行ったことのごとく有効とすることを命ずる。……』¹⁾

アルフォンソ11世が1345年5月9日に発布した勅令の中のこの文言によって、従来の市民総会（市会）の権限を全て委譲された国王任命の特定の上級官職者からなる政治的機関であるアユンタミエントがブルゴス市に設置され、その中心的官職としてレヒドール職が導入された。いわゆる《開放型市会制》から《閉鎖型市参事会制》への移行である。従来は、この改革によって、市民全体の政

治的機構としての《民主的な》市民総会に終止符が打たれ、それにかわって国王に任命された役人による閉鎖的な市参事会が成立したと理解されていた²⁾。しかしながら、この解釈に関しては、13世紀半ば頃にはブルゴス市において既に階層分化が進行し都市政治の少数支配化傾向が見られ、アルフォンソ11世期の改革を契機に都市政治が《閉鎖》化したのではないことが近年実証されたことにより³⁾、現在は、改革はそれ以前のブルゴス市政治の事実上の状況を《法的》に確認したものという見方が一般的となっている⁴⁾。もっとも、従来の解釈が少々色あせたからといって、アユンタミエントやレヒドール（レヒミエント制）という共通の制度で王国の諸都市が統治されていくという点において、王国の統一化、中央集権化の手段としてのこの改革の意義が非常に大きいことに変わりはない。これらの制度を通してブルゴス市は国王の中央集権化構想の展開にとっての理想的な舞台となった⁵⁾。

中央集権化の一端としてのブルゴス市政への王権の介入に関しては、アルフォンソ11世の改革が最初ではない。それ以前にも、アルフォンソ10世によるフェロ・レアルの賦与やサンチェ4世による改革といった重要な介入の存在が確認できる。前者には、単なる《欽定》都市法の賦与という意味あいだけではなく、都市の判事であるアルカルデ職の国王任命、都市の行政執行評議組織であるフラド職の創設という事実が含まれていた⁶⁾。また、後者は前述のフラド職の権能を明確にした点でアルフォンソ11世の改革へとつながる過渡的改革であったと言える⁷⁾。これらの法令や改革の延長線上にあるアルフォンソ11世の改革もまた、単にフラド職に代えてレヒドール職を創設しただけでなく、ブルゴス市の行政機構や政治構造に大きな影響を与えた。

本稿では、1345年のアルフォンソ11世の『改革勅令』と1426年に上級官職者と一般市民の対立を解決すべく出されたカストロ伯の『仲裁判決』を史料として用いながら、アルフォンソ11世の市政体改革後のブルゴス市の都市官職機構と官職の権能について簡潔に紹介しつつ、官職保有の在り方について考察するものである。

(注)

- 1) “Ordenanzas otorgadas por el rey Alfonso XI a la ciudad de Burgos creando el regimiento”, A. M. B., Sec. Hca., n. 80 (Extraídas de un traslado realizado en 1493), cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos en la Baja Edad Media (1345–1426)*, Valladolid, 1978, Apéndice Documental 5, pp. 151–153. 以下、この史料を『改革勅令』と称す。
- 2) 《開放型市会制》が全ての市民による『自治的、民主的』な総集会を市会とするのに対し、《閉鎖型市参事会制》は、レヒミエントを通して権力を独占した少数支配者もしくはアユンタミエントに出席する都市の上級官職保有者による限定的な都市政府を市会の代表組織とする制度である。この改革によって誕生した市参事会とも言うべきアユンタミエントは市会を代表し、以前の《開放型市会》は、アユンタミエントが必要に応じて召集し、教区の一般市民も参加しうる《拡大市会》へと形を変えた。《開放型市会制》から《閉鎖型市参事会制》への移行に関しては、C. Carlé, *Del concejo medieval castellano-leonés*, Buenos Aires, 1968, p. 229 を参照。
- 3) Teófilo Ruiz, “The transformation of the Castilian Municipalities: The case of Burgos (1248–1350)”, *Past and Present*, 77, 1977, pp. 3–32; “Prosopografía burgalesa”, *Boletín de la Institución Fernán González*

(B.I.F.G.), n. 184, 1975, pp. 476-499; *Sociedad y poder real en Castilla*, Barcelona, 1981 および拙稿, 『ブルゴス市寡頭支配者層の成立と王権 (1250-1350年)』, 大阪外国語大学, *Estudios Hispánicos*, 14, 1988, pp. 71-84 を参照。

- 4) アルフォンソ11世の改革は、都市政治の実態に《法的》基盤を与えたものであって、カスティーリャ都市の政治的構造に急変化をもたらしたわけではない。E. González Díez, *El concejo burgalés (884-1369). Marco histórico-institucional*, Burgos, 1983-1984, p. 423; C. Estepa Díez, *Estructura social de la ciudad de León (Siglos XI-XIII)*, León, 1977, p. 486 を参照。
- 5) このような変化を経験したのはブルゴス市だけではなく、セゴビア市 (1345年5月5日)、レオン市 (同年7月6日)、マドリッド市 (1346年1月6日) といったカスティーリャ王国の重要な諸都市もそうであった。ムルシア市 (1325年) とセビーリャ市 (1327年) は『改革勅令』以前からレヒドール職が設置されている。
- 6) 1255年8月25日にブルゴス市に賦与されたフェロ・レアルは、理論上、従来のブルゴス市慣習諸法 (フェロス・デ・ブルゴス) に代わるブルゴス市の法規範となった。その第1巻, 第7章, 第2条には国王任命アルカルデ以外の裁判の禁止がうたわれ, 同第3条からは, 都市行政執行部としての12名のフラド職の存在が確認できる。La Real Academia de la Historia, *Fuero Real del Rey don Alfonso el Sabio*, Madrid, 1836 (Edición Facsímil, Valladolid, 1979), pp. 17-18. しかしながら, この法令後に直ちに国王任命のアルカルデが従来から存在した市会任命のアルカルデに取って代わったというわけではなく, その交替は漸次行われ, 市会任命のアルカルデが見られなくなるのはアルフォンソ11世の改革を待たねばならない。
- 7) 1285年4月26日に公布された勅令により, 12名からなるフラド職の権能は, 罪人の逮捕から起訴に至るまでの警察機能, 公共事業の発注や入札といった行政機能, 租税の徴収や徴税請負といった財政機能と広範囲にわたることが確認された。E. González Díez, *El concejo burgalés (884-1369)*, pp. 419-422.

1. アルフォンソ11世の『改革勅令』と上級官職

ブルゴス市内では, 1330年代頃から平民騎士層の中の階層分化が進み, より限定された平民騎士による少数支配体制が生まれつつあったが, その一方では, 1337年の王令が示すように, 平民騎士間および平民騎士と平民の間の対立に端を発する無秩序と暴力が横行していたり。アルフォンソ11世の『改革勅令』も, その冒頭部の『……余への奉仕のため, ならびに同市およびその臣下や属村, 属域の利益のために成される事柄や成されるべき事柄をめぐり, 多くの人々がその市会に不和と妨害をもたらすことから, ……』が示すように, そのような状況の下で公布されたもので, やはりブルゴス市の治安, 秩序の回復を目的としていた²⁾。『改革勅令』の内容は, 基本的には王国任命の都市官職の職務および権能に関するもので, ①アウンタミエントの設置, レヒドールの任命, ②レヒドールの職務と権能, ③アルカルデの任命, ④アルカルデの権能と職務規定, ⑤エスクリバーノ・マヨールの職務, ⑥アウンタミエント開催規定という順に記されている。しかしながら, 他の官職の職務や権能に関しては直接言及されてはおらず, その意味で比較的概括的な命令であったと言える。

A) アウンタミエント

『……16名の紳士なる市民は, ……アルカルデ, メリーノおよびエスクリバーノ・マヨールと共

に会して、……従来より市会が行い命令していた全ての事柄を行い、命令する権限を持つこと、さらに、この者達が行うことは市会が一致して行ったことのごとく有効とすることを命ずる。……』³⁾と序文でも引用した通り、アルフォンソ11世の勅令によって、レヒドールを中心とする王国任命の都市の上級官職保有者（レヒドール16名、アルカルデ2名、メリーノ1名、エスクリバーノ・マヨール1名）からなるアユンタミエントが従来の《開放型市会》に代わる行政機関として設置された⁴⁾。もっとも、アユンタミエントの機能は、厳密な意味において、司法権に関するものはアルカルデ職から、それ以外の様々な行政上の権能はレヒドール職から由来するものであった。この点において、ゴンサレス・ディエスが、アユンタミエントをレヒミエントおよび他の上級官職の集会的機関として捉えているのも妥当であると言える⁵⁾。また、ガルシア・サインス・デ・バランダによると、レヒドールがその権能を行使する際には必ずアユンタミエントを介さなければならず⁶⁾、この点において、アユンタミエントが市行政の機能上不可欠な役割を果たしていたことが言える。アユンタミエントの開催場所は、サンタ・マリア橋の塔もしくは司教座聖堂、開催日時は毎週火曜日と土曜日とされた⁷⁾。会議が成立するためには、8～10名のレヒドール、アルカルデ2名のうちどちらか1名、メリーノそれにエスクリバーノ・マヨールもしくはその代理の2名の公証人のうちどちらか1名の出席が最低限必要であった⁸⁾。そして、アユンタミエントの構成員が市内にいながら病気以外の理由で会議に欠席した場合には、その度毎に60マラベディーを罰金として支払い、その金は出席者で分配されることになっていた⁹⁾。また、アユンタミエントが認める市民集会以外の禁止と違反者の逮捕、取り調べの間のその財産のアユンタミエントによる管理が勅令によって定められた¹⁰⁾。

B) レヒドール

アルフォンソ11世によって『紳士なる16名の市民』すなわちレヒドールに任命された16名の人々（ラモン・ボニファス、フェラン・ガルシア・デ・アリエルサ、ロベ・ペレス、アルフォンソ・サンチェス・デ・ペレーリャ、フアン・ギリエン、ギリエン・ファブレ、ベルナル・デ・プレスティネス、ミゲル・ガルシア・デ・ゴリアス、ディエゴ・マティネス・デ・サント・ドミンゴ・デ・シロス、ロストロ・ボニファス、シモン・ゴンサレス、ゴンサロ・ヒル、フアン・ルイス・デ・サンチストル、フアン・トラパス、フアン・マテ、ヒル・ゴンサレス）は、ブルゴス市の有名な平民騎士家系の出身であった。彼らの家系は、主に商業活動で蓄えた財をその経済的基盤に改革以前からブルゴス市の少数支配者層を形成していた¹¹⁾。レヒドール職に就くにはブルゴス市民権を有するオンブレス・ブエノスであることが必要条件であった¹²⁾。レヒドールの任命には、①市会による候補者の指名、それを受けた形の国王による任命、②国王による直接任命の2通りの方法があり、レヒドール職に就任する際には、まずアユンタミエントに対して宣誓を行い、後に市会、言い換えれば、教区代表の一般市民の前でも宣誓を行わなければならなかった¹³⁾。レヒドールの年俸は750マラベディーで市のユダヤ人街税12000マラベディーから宛てがわれた¹⁴⁾。その機能は、勅令に『……当

市の市会の諸問題を検討し、王国への奉仕となり、また当市ならびにその臣下、属村と属域の利益と保護になると思われる全ての事柄を議決すること……』とあるように非常に多岐にわたり、市行政の全ての面に及んでいた。《改革勅令》に述べられたレヒドールの権能は次のようにまとめることができる。

- (1) 市の共有財産の管理および市の諸収入の徴収、市の財政業務一般¹⁵⁾。
- (2) ブルゴス市に対する債務者の財産への担保設定（エスクリバーノ・マヨールとメリーノもしくはアルカルデを伴う）¹⁶⁾。
- (3) ブルゴス市および属域における公共事業の実施¹⁷⁾。
- (4) ブルゴス市およびその属域内に施行される条例の制定¹⁸⁾。
- (5) 都市の代表者（マンダデーロ）の任命、および派遣¹⁹⁾。
- (6) 市会総会に代わっての一般都市官職の任命（12名のフラド職、4教区代表、26教区代表など）²⁰⁾。
- (7) 犯罪調査のための調査官（ベスキンドール）の任命²¹⁾。
- (8) ブルゴス市および属村、属域に対する4000マラベディーまでの分担金の徴収（マンダデーロ派遣に必要な経費が不足している場合）²²⁾。

これらの権能は、『……また、従来より、市会が行い命令してきた全ての事柄を行い、命令する権限を持つこと、さらに、この者達が行うことは市会が一致して行ったことのごとく有効とすることを命ずる……』が示すごとく、改革以前の《開放型》市会が有していた権能であった。ボナチアの言葉を借りれば、レヒドールは『ある程度まで万能であり、アルカルデの裁判的機能、メリーノやエスクリバーノ・マヨールの権限に属する補助的機能を別にすると、他の全ての市政一般はレヒドールの権限内にあると言える』²³⁾。もっとも、レヒドールがこれらの権能を行使する際には、ブルゴス市の慣習にしたがって、エスクリバーノ・マヨールもしくはその代理人を伴わなければならなかった²⁴⁾。そして、レヒドールは他の官職を兼ねることを禁じられていた²⁵⁾。レヒドール職は、その人数（アユンタミエント構成員、計20名のうちレヒドールが16名という圧倒的多数を占める）および広範囲にわたる権能からもアユンタミエントの中で最も重要な官職であった。都市政治における大きな権限をもたらすこの官職が有力家系間の闘争の原因となったことはけっして不思議なことではない²⁶⁾。また、レヒドールの権限、とくに一般都市官職の任命権をめぐることは、『改革勅令』に細かい規定がなかったこともあり、アユンタミエントと一般市民（その代表者としての教区代表）との間に係争が生じている。後に述べるが、1426年に当時のカスティーリャ地方長官 Adelantado de Castilla であったカストロ伯ディエゴ・ゴメス・デ・サンドバルが下した《仲裁判決》はこの問題を知るうえでの格好の史料である。

C) アルカルデ

『改革勅令』の中のアルカルデに関する記述は、アルカルデの任命とその俸給、それに公判に関

するものであり、アユンタミエントの中に組み入れることによってアルカルデにある程度の行政的権限を与えたこと以外は、従来通りのアルカルデの司法活動を基本的前提とするものであった²⁷⁾。アルフォンソ11世は2名のアルカルデ（ベラスコ・ペレス・デ・サント・ファグンドとベラスコ・ガルシア・デ・バリャドリッド）を任命した²⁸⁾。そして、その年俸をそれぞれ2000マラベディーとした²⁹⁾。アルカルデの行う裁判に関しては、ブルゴス市の慣習に従ってエスクリバーノ・マヨールまたはその代理の公証人を伴い³⁰⁾、メリーノの屋敷において週に2回、木曜日と土曜日に公判を行うことが定めされた³¹⁾。そしてエスクリバーノ・マヨールもしくはその代理の公証人が公判記録をとるよう義務付けられた³²⁾。公判を実施しないアルカルデは、罰金としてその度毎に100マラベディーを支払わなければならなかった。その金は市の公共事業費もしくは公共建築物の維持費に充てられた³³⁾。

アルカルデに就任するための必要条件もレヒドールの場合と同様、ブルゴス市民権を有するオンブレス・ブエノスでなければならなかった。就任過程も、①市会による指名、それを受ける形での国王による任命と、②国王による直接任命の2通りがあった。アルカルデは国王の任命状を獲得し、それとは別にレヒミエントの承認を得て初めて実際のアルカルデ職に就くことができた。就任の際には必ず宣誓を行ったが、就任宣誓書からはアルカルデの様々な義務を知ることができる。例えば、1411年のアルカルデ就任宣誓書には、(1)諸法律ならびに国王命令の遵守、(2)国王の領地、名誉、諸権利の保護ならびに都市の諸権利、法律、慣習の保護、(3)国王の秘密の固守、(4)国王への害悪の排除、(5)公平な裁判の実施、(6)収賄の禁止がアルカルデの基本的義務としてうたわれていた³⁴⁾。また、これ以外にも、(7)迅速な裁判の実施、(8)聖職者の裁判への参加の禁止、(9)アルカルデの代理人擁立の禁止といった義務や禁止事項を守らなければならなかった³⁵⁾。これらのアルカルデは、ブルゴス市域ならびに属域の世俗裁判権を代表し³⁶⁾、1255年以降はフェロ・レアルに従って裁判を行った。彼らの裁判権は教会や修道院、貨幣製造人 *monedero* などの特定の人々には及ばなかった。ブルゴス市内に同市の裁判権の及ばない団体や個人が存在することは、同市が裁判権を行使する際に少なからず障害となった³⁷⁾。アルカルデはブルゴス市民にとっての第一審を担当した。また、ミランダ村やパンコルボ村、ムニョー村といった独自のアルカルデやメリーノを有するブルゴス市の所領で行われた裁判の控訴審（第2審）を担当することができた³⁸⁾。アルカルデ職は終身制であった³⁹⁾。

D) メリーノ

アユンタミエントの一員としての権能を別にすると、『改革勅令』の中にはメリーノの任命や固有の権能、職務、俸給等に関する記述はほとんど見られない。『アルカルデはメリーノの館で公判を開催すること……』と言う文言が見られるのみである⁴⁰⁾。この事実は、『改革勅令』によってメリーノ職がアユンタミエントを構成する官職とされたこと以外の点、すなわち、職務や権能等に関しては以前の慣習通りで変化がなかったことを推測させる。任命方法は他の上級官職の場合と同様であると思われ、必要条件としてはブルゴス市民権を有していなければならなかった。司法分野に

おけるメリーノの職務は、アルカルデの下した裁決の実行、アウンタミエントの構成員としての職務は、アウンタミエント（もしくは市会）に委託された職務、例えば、秩序の維持、諸税・罰金の徴収や貸付金の回収、犯罪人の逮捕、都市の警備、兵の調達などであった⁴¹⁾。これらのメリーノの職務は、アルカルデやアウンタミエントという上級機関から出された諸命令の単なる執行という形で行われ、この点において、メリーノの権能は二次的な性格のものであったと言える⁴²⁾。俸給に関しては、一定額の年俸を得ていたかどうかは判っていないが、犯罪者や法律違反者に課せられた罰金はメリーノの収入の重要な部分であったと思われる⁴³⁾。

メリーノやその代理人の職務執行の方法に対する一般市民の不満は少なくなかった。アウンタミエントの諸命令やアルカルデの判決の不履行、窃盗行為や不当課税、不当逮捕といった職権濫用が数多く見られた⁴⁴⁾。

E) エスクリバーノ・マヨールと一般公証人

アルフォンソ11世は『改革勅令』の中で、アロンソ・ベレスをエスクリバーノ・マヨールに任命してアウンタミエントの一員とし、ブルゴス市の公証人の数をエスクリバーノ・マヨールを含めて38名と定めた⁴⁵⁾。同時に、多忙なエスクリバーノ・マヨールの職務を考慮して、エスクリバーノ・マヨールに対して、ブルゴス市の一般公証人37名の中から2名をエスクリバーノ・マヨールの補佐役として自由に任免する権限を与えた⁴⁶⁾。このような権限がエスクリバーノ・マヨールに与えられたという事実は、エスクリバーノ・マヨールと一般公証人の間の重要性や権能に大きな格差が生じたことを示している。エスクリバーノ・マヨールの主な職務は、アウンタミエントの公証人としてアウンタミエントが発行する公文書を認証することであるが、この他にも、メリーノの館で開かれる裁判の公判記録の作成（アルカルデの権能を参照）、ペスキンドールの調査への同行、メリーノによる判決執行の立会いなどの職務が挙げられる。また、『改革勅令』によると、具体的な金額は判らないが、エスクリバーノ・マヨールの年俸は今までの額の2倍と定められた⁴⁷⁾。また、市会からの俸給のはかにも、罰金や訴訟、市民権証書発行に由来する収入や他の手続き料が収入としてあった⁴⁸⁾。

エスクリバーノ・マヨールが純然たる市の上級官職であり、アルカルデやレヒドール、メリーノと共にアウンタミエントに出席する権利と義務を有したのに対し、一般公証人は市の行政執行部の機能とは直接的には関係しておらず、その職は市会の官職でもなかった。一般公証人の任命は、フエロ・レアルに既に国王によるとされていたが⁴⁹⁾、このアルフォンソ11世の『改革勅令』によって制度化され⁵⁰⁾、この時点で、ブルゴス市が有していた公証人任命権は完全に失われた。

(注)

- 1) A. M. B., Sec. Hca., n. 1388 cit. por *Colección Documental del Archivo Municipal de Burgos: Sección Histórica (931-1515)*, I, Burgos, 1983, p. 205, n. 207. この勅令は、市会開催中に武器を使用した者への重

- 刑（手首切断や死刑）、係争で武器を使用した者の追放、市会に武器を携帯した者の拘留（60日）を定めていた。拙稿、『ブルゴス市寡頭支配者層の成立と王権（1250-1350年）』, pp. 73-74 を参照。
- 2) 『改革勅令』“... porque en los conçejos vienen muchos omes para poner discordia e destoruo en las cosas que conplen e se deuen fazer e ordenar por nuestro seruicio e por pro comunal de la dicha çibdad e de sus vasallos e de sus aldeas e de su termino;...” 本稿では、注釈に『改革勅令』と『仲裁判決』の2史料を原文で掲載した。両史料の全文は「史料翻訳」として別の機会に紹介する予定である。
 - 3) 『改革勅令』“... mandamos que ayan poder para fazer e ordenar todas las cosas e cada una de ellas que conçejo faria e ordenaria sy todos en uno ayuntados lo ordenasen, e que sea firme e valedero lo que estos fezieren asy como sy el conçejo todo coyuntado lo fiziesen;...”
 - 4) ビベルトは、中世マドリッド市に関する研究で、アユンタミエントは《市政府に参加する様々な要素の集まる》行為を意味するものであり組織ではないと述べている。R. Gibert, *El concejo de Madrid. Su organización en los siglos XII al XV*, Madrid, p. 139. しかしながら、『改革勅令』によると、ブルゴス市のアユンタミエントには統治、行政機能が備わっており、その開催に関する諸規定も存在したことから、少なくとも14世紀半ばのブルゴス市において、一つの組織として誕生しつつあったことは明白である。
 - 5) E. González Díez, *El concejo burgalés...*, p. 437.
 - 6) J. García Sainz de Barranda, *La ciudad de Burgos y su concejo en la Edad Media*, II, Burgos, 1967, p. 68. レヒドールの権能に関しては、レヒドールの項で述べることにする。
 - 7) 『改革勅令』“... agora e de aqui adelante, que se ayunten en la Torre de la Puente de Santa Maria o en la Iglesia de Santa Maria la Cathedral, do es acostumbrado de fazer conçejo, dos dias en cada selmana, que sea el uno el martes e el otro el sabado;...”
 - 8) 『改革勅令』“... e porque los dichos seze omes buenos e alcaldes e merino e escriuano mayor non pudieren estar toda via cotyidianamente en la villa para se ayuntar a esto que dicho es, tenemos por bien que, seyendo todos los que fincaren en la villa llamados, que los diez o los ocho de ellos seyendo ayuntados de consumo con los alcaldes o con cualquier de ellos e con el merino e con el dicho escriuano mayor o con el uno de los dos escriuanos publicos que el escogiere como dicho es, que puedan fazer e ordenar e mandar en todas las cosas e cada una de ellas que todos los sobredichos farian seyendo ayuntados,...” しかしながら、この規定はあまり遵守されなかったと思われる。事実、カストロ伯の『仲裁判決』の第8項には、この規定の違反行為が訴えられており、それに対して『改革勅令』遵守の命令が出されている。カストロ伯の『仲裁判決』に関しては後に改めて述べるものとする。
 - 9) 『改革勅令』“... que pechen, cada uno, por cada vez, sesenta mrs. de la dicha moneda, saluo sy fuere enfermo de tal enfermedad que non pueda uenir; e esta pena que sea para los otros que se ayuntaren...”
 - 10) 『改革勅令』“... de aqui adelante non se faga nin se ayunten en la dicha çibdad conçejo nin ayuntamiento saluo quando estos sobredichos, con los alcaldes e por el escriuano mayor e con el merino, vieren que cumplen de los fazer ayuntar al conçejo o ayuntamiento; e sy alguno o algunos fezieren ayuntamiento en otra manera que el nuestro merino, o los alcaldes que y fueren e estos omes buenos nonbrados sobredichos e los que ovieren este oficio de aqui adelante, que les prendan los cuerpos e los tengan presos e bien recabdados e nos lo enbien a dezir porque nos fagamos de ellos lo que nuestra merçed fuere, e entre tanto que pongan todos sus bienes en recabdo;...”
 - 11) Teófilo Ruiz, “The transformation of the Castilian Municipalities: The case of Burgos (1248-1350)”, *Past and Present*, 77, 1977, pp. 3-32; “Prosopografía burgalesa”, *Boletín de la Institución Fernán González (B.I.F.G.)*, n. 184, 1975, pp. 476-499; *Sociedad y poder real en Castilla*, Barcelona, 1981 および拙稿、『ブルゴス市寡頭支配者層の成立と王権（1250-1350年）』, pp. 71-84 を参照。
 - 12) ブルゴス市の市民権を得るには、市内に家を所有し、居住（通常6年間以上）し、納税義務を果すこと。さらにこれらを保証するブルゴス市民権を有する保証人を立てねばならなかった。J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 44-45.

- 13) R. Gibert, *El concejo de Madrid*..., p. 131 および J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., p. 78.
- 14) 『改革勅令』 "... otrosy, por quanto estos seze omes buenos han de ver e de fazer e de ordenar todas las cosa sobredichas e han de tomar trabajo en ello e destoruo de sus haciendas, tenemos por bien que aya cada uno de ellos, en cada anno, sietecientos e çinquenta mrs. de esta moneda a diez dineros el mrs., e para esto que ayan los doze mill mrs. que conçejo ha en la juderia de la dicha çibdad, en cada anno, ... "
- 15) 『改革勅令』 "... que ayan poder conplidamente para administrar todas las rentas de los comunes de la dicha çibdad recabdandolos e faziendolos recabdar, atanbien las rentas que son del tienpo pasado como del tienpo por venir de aqui adelante; ... "
- 16) 『改革勅令』 "... que fagan prender e prendan e tomen tantos de los bienes de aquellos que algo deuieren al conçejo como dicho es; ... "
- 17) 『改革勅令』 "... e otrosy que estos sobredichos ayan poder de fazer e mandar fazer las lauores de la çerca de muros, e de las calçadas, e de las puentes e de todas las otras cosas que son o fueren menester en la dicha çibdad e en sus terminos. ... "
- 18) 『改革勅令』 "... e otrosy que estos sobredichos puedan poner, e fazer, e guardar en la dicha çibdad, e en sus aldeas, e en sus terminos todas aquellas posturas que cumplieren para nuestro seruicio e para pro de la dicha çibdad, so aquellas penas que entendieren que cumplen para que sean guardadas; ... "
- 19) 『改革勅令』 "... e otrosy, que estos sobredichos ayan poder para nombrar de conçejo mandaderos, e enbiar los a nos quando vieren que cumple para nuestro seruicio, o para pro del conçejo, o quando nos enbiaremos por ellos; otrosy para los enbiar algunas de las çibdades e villas e logares de su comarca do entendieren que comple; e sy alguna contienda, o prendas, o tomas entre ellos acaesçiese. ... "
- 20) 『改革勅令』 "... e que estos sobredichos ayan otrosy poder de dar e partir en cada anno los ofiços de la villa que el conçejo e las vezindades de la dicha çibdad solian dar e partir en cada anno entre sy en el tyenpo que el conçejo e las vezindades los solian dar e partyr; e que non aya y otros ofiçiales de los que el conçejo e las colaciones solian dar e poner en la dicha çibdad, nin los doze, nin los veynte e seys, salvo los que estos sobredichos ordenaren e dieren con los alcaldes ordinarios e merino e escriuano mayor; ... " これと同時に、アユンタミエントが認めるもの以外の官職の設置が禁止された。
- 21) 『改革勅令』 "... otrosy, que estos sobredichos den e fagan los pesquisidores que fagan las pesquisas de los mefeçios con el escriuano mayor o con dos escriuanos publicos que an de servir el dicho ofiço de la escriuania mayor por el dicho Afonso Perez, nuestro escriuano mayor, o con qualquier de uos, ... "
- 22) 『改革勅令』 "... e si acaesçiere que para enbiar mandaderos a nos e a otras partes, segun dicho es, ouieren menester de les dar alguna cosa, e estos sobredichos vieren que non ay renta de los comunes del conçejo de que se puedan pagar, que puedan derramar por la villa e en las aldeas e vasallos e en el termino fasta quantya de quatro mil mrs., e non mas, ... "
- 23) J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., p. 74.
- 24) 『改革勅令』 "... que ayan poder para fazer e ordenar todas las cosas e cada una de ellas que conçejo faria e ordenaria sy todos en uno ayuntados lo ordenasen, e que sea firme e valedero lo que estos fizieren asy como sy el conçejo todo coyuntado lo fiziesen; e todo esto sobredicho que en esta carta se contyene que lo fagan todo con el nuestro escriuano mayor de la dicha çibdad o con los escriuanos que han de servir por el ofiço de la escriuania mayor, e non con los otros nin con otro escriuano, asy como fue e es uso e costunbre de la dicha çibdad, ... "
- 25) 『改革勅令』 "mandamos que estos sobredichos nonbrados que son para esto e los que fueren de aqui adelante que non tomen ningunos de los ofiços para sy saluo esto que les nos damos; ... "
- 26) J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., pp. 78-79.
- 27) アルカルの都市行政の介入権は、1285年のサンチャゴ4世の改革の時に認められている。A. M. B., Sec. Hca., n. 2774., cit. por E. González Díez, *El concejo de Burgos*..., p. 449.

- 28) 『改革勅令』“...e otrosy, tenemos por bien de poner alcaldes ordinarios en la dicha çibdad que sea dos e non mas e que sea el uno Velasco Perez de Sant Fagundo e el otro Velasco García de Valladolid, fijo de Lorenzo Yvannez, ...” 因に、アルフォンソ11世の改革以前は、フェルナンド4世によって賦与された特権によって、市会が独自で市民の中から4名のアルカルデを任命することができた。A.M.B., Sec. Hca., n. 80, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 80. また、1366年にエンリケ2世がキリスト教徒だけでなくユダヤ教徒やイスラム教徒に関する刑事、民事の訴訟を裁くべく6名の判事を任命した。A.M.B., Sec. Hca., n. 152, cit. por *ibíd.*, p. 80. 1399年には、エンリケ3世がアルカルデを2名ずつ3組に分け、各組が4か月交替でブルゴス市における刑事訴訟を裁くものと定めた。A.M.B., Sec. Hca., n. 2973, cit. por *ibíd.*, p. 80. これ以降、ブルゴス市におけるアルカルデの数は6名に定着した。
- 29) 『改革勅令』“...e tenemos por bien de les mandar dar, en cada anno, a cada uno de ellos, por su soldada, dos mill mrs., ...”
- 30) 1322年にアルフォンソ11世がエスクリバーノ・マヨールに対してアルカルデの補佐を義務付けた命令を出している。A.M.B., Sec. Hca., n. 99, cit. por, J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 83.
- 31) 『改革勅令』“...otrosy, tenemos por bien que los dichos alcaldes oyan los pleitos de la justiçia en casa del merino e non en otro logar e que los oyan dos dias en la semana, el jueves e el sabado, ...”
- 32) 『改革勅令』“...e que los escriua el escriuano mayor o el escriuano o escriuanos publicos que han de servir por el ofiçio de la escriuania mayor, e non otro ninguno, segund fue e es costunbre de la dicha çibdad; ...”
- 33) 『改革勅令』“...e sy los dichos alcaldes e alguno de ellos non vinieren a oyr los dichos pleitos al dicho logar en cada uno de los dichos dos dias, que pechen cada uno, por cada vez, çient mrs. de esta moneda a diez dineros el mrs., para la çerca e las puentes de la villa, ...”
- 34) A.M.B., L. de A. de 1411, f. 15, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 85.
- 35) これらは1322年にアルフォンソ11世が発した命令の中に述べられている。A.M.B., Sec. Hca., n. 99, cit. por *ibíd.*, pp. 82, 83 y 86. また、エンリケ3世も1395年にアルカルデの代理人起用の禁止命令を発している。A.M.B., Sec. Hca., n. 2967, cit. por *ibíd.*, p. 86.
- 36) A.M.B., Sec. Hca., n. 125, cit. por E. González Díez, *El concejo de Burgos...*, p. 446.
- 37) J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 84; E. González Díez, *El concejo de Burgos...*, p. 448.
- 38) A.M.B., Sec. Hca., n. 151, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 86. ブルゴス市と属村の間の司法行政の詳細に関しては、J. A. Bonachía, *El señorío de Burgos durante la Baja Edad Media (1255-1508)*, Valladolid, 1988, pp. 182-262 を参照。
- 39) E. González Díez, *El concejo de Burgos...*, p. 450.
- 40) 『改革勅令』“tenemos por bien que los dichos alcaldes oyan los pleitos de la justiçia en casa de merino...”
- 41) シムエス・ルイスはメリーノの権能を経済的・財政的分野、行政・統治分野、司法分野、軍事的分野の4つに大別できると言う。A. Sinués Ruiz, *El merino*, Zaragoza, 1954, p. 81.
- 42) G. Sainz de Barranda, *La ciudad de Burgos...*, II, p. 184; A. Sinués Ruiz, *El merino*, p. 219.
- 43) J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 88.
- 44) *Ibíd.*, pp. 88-89.
- 45) 『改革勅令』“...tenemos por bien que en la dicha çibdad que aya numero cierto de escriuanos publicos e que sean treynta e ocho con el escriuano mayor e non mas; ...”
- 46) 『改革勅令』“...tenemos por bien que pueda escoger dos escriuanos publicos quales el quisiere que sean del numero de los treynta e ocho escriuanos publicos, ...e sy estos dos escriuanos non siruieren el dicho ofiçio como cunple que los pueda dexar sy quisiere e tomar otros dos escriuanos de los sobredichos del dicho numero para que syruan en el dicho ofiçio como dicho es, ...”
- 47) 『改革勅令』“...tenemos por bien que de aqui adelante que le den la soldada doblada, dos tantos de quanto le solian dar fasta aqui cada anno; ...” 因に、1379年の時点でエスクリバーノ・マヨールであったペドロ・フェルナンデス・デ・ビリエガスに支払われた年俸は1600マラベディーであった。A.M.B., L. de A. de

1379, F. 50. cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 96.

48) F. Arribas Arranz, “Los escribanos públicos en Castilla durante el siglo XV”, *Centenario de la Ley del Notariado*, I, Madrid, 1964, p. 249.

49) *Fuero Real*, libro I, título 8, ley 1, “...establecemos que en las cibdades o en las villas mayores que sean puestos escribanos públicos e jurados por mandado del rey o de quien él mandare e non por otro...”

50) J. Martínez Girón, “Estudios sobre el oficio de escribano en Castilla durante la Edad Moderna”, *Centenario de la Ley del Notariado*, II, Madrid, 1964, p. 272. 一般公証人の詳細に関しては, E. Corral García, *El escribano de concejo en la Corona de Castilla (siglos XI al XVII)*, Burgos, 1987 を参照。

3. カストロ伯の『仲裁判決』と一般官職

1345年のアルフォンソ11世の『改革勅令』によって, 一般都市官職の任命権がアユンタミエントに帰属すると定められたことは既に述べた。しかしながら, 『改革勅令』ではその具体的な方法ならびに官職者の身分的条件や職務に関する規定はみられず, アユンタミエントによる行政の在り方や一般都市官職の任命権の行使をめぐる, ブルゴス市のアユンタミエントと諸教区の一般市民との間に意見の相違や対立が生じた。このような両者間の緊張関係は, 新たにレヒドールに任命されたマルティン・サンチェス・デ・パレンスエラ Martín Sánchez de Palenzuela のブルゴス市民権の正当性をめぐって1425-26年に頂点に達した。一般市民とその利害を代表するプロクラドールは彼の就任に反対する一方, 彼を支持する上級官職者はプロクラドールがアユンタミエントを傍聴することを禁止した。両者の対立は激しく, 1426年のブルゴス市議会議事録には《市民の蜂起》という表現が見られるほどであった¹⁾。このような両者の対立を解決すべく, 同年, カスティーリャ地方長官 adelantado mayor de Castilla であったカストロ伯ディエゴ・ゴメス・デ・サンドバルによって『仲裁判決』が出されたものである²⁾。

カストロ伯の『仲裁判決』は25の判決文から成っている。それらの多くは, 城代や4教区フィエル, マヨルドモ, マンダデーロ, プロクラドールといった一般官職の任期や就任資格, 俸給, 任命方法に関するものであるが, この他にも, 一般市民の諸要求に対する解答や, 上級官職者の不正行為や職権濫用の告発に答える判決もみられる。この『仲裁判決』によって, アルフォンソ11世の『改革勅令』では明確でなかった一般官職の任期や選出方法があらためて規定された。本章は, カストロ伯の『仲裁判決』を中心史料に用いつつ, ブルゴス市の一般官職の種類と機能を紹介するものである。

A) 城代 (アルカイデ)

ブルゴス市の管轄権下にある城砦は, ララ城, セリョリーゴ城, ムニョー城の3つであり, それぞれに城代職が設置されていた。カストロ伯の『仲裁判決』によって, それぞれの城代職の任期は1年とされ³⁾, 城代職に就くにはその職にふさわしい市民でなければならない⁴⁾, レヒドールやアル

カルデ、エスクリバーノ・マヨールらの兼職は禁止された⁵⁾。その選出・任命に関しては、1年に3教区の割合で諸教区にそれぞれの城代職の候補者選出権が順番にふり当てられ、該当教区はそれぞれ2名の候補者を選出し、アユンタミエントがその内の1名をそれぞれの城代職に任命するという形式が取られた⁶⁾。教区による候補者の選出に際して上級官職者の《要請や説得 rruego e ynduzimiento》に左右されることなく、市の利益のためにその職にふさわしい人物を選出するよう命じられた⁷⁾。任命に際するアユンタミエントの開催は義務付けられており、開催されない場合は教区が城代職を任命することができると規定された⁸⁾。逆に、教区選出の候補者がいない場合は、アユンタミエントが自分達以外から城代職にふさわしい人物を選出して任命することができた⁹⁾。城代職は毎年、1月1日に任命された¹⁰⁾。そして、城代職を1年間勤めた者は向こう6年間城代職に就くことを禁じられた¹¹⁾。城代職の俸給は、アルカルデ、レヒドールとメリーノの中から選出された2名と教区から選出された2名の計4名からなる委員会によって査定され¹²⁾、その額は、それぞれの城代職に付随する諸収入（城代職収入）を基礎にして算出された。城代職収入から城代に支払われる俸給を差し引いた残りは市の純収入として扱われた¹³⁾。

B) 4教区フィエル

フィエル職に関する最初の記述は、サンチョ4世が1288年にブルゴス市に賦与したフラド職の制度化に関する特権の中に確認できる。この時点では既に、フィエル職の職務はブルゴス市の慣習によって規定されていた。それによると、アルカルデの介入を受けることなく、市会が一般市民の提言によりフィエルを選出、任命することになっていた¹⁴⁾。しかしながら、1345年以後、アユンタミエントはアルフォンソ11世の『改革勅令』で自分達（厳密にはレヒドール）に与えられた都市官職任命権を根拠に、そして一般市民側はサンチョ4世によるフィエル職の任命に関する特権を根拠としてそれぞれがフィエル職の任命権を主張しあい、両者間の係争は絶えなかった。このような状況の中で出されたカストロ伯の『仲裁判決』によって、フィエル職に就くにはブルゴス市の一般市民でなければならないことが確認され、レヒドールやアルカルデ、メリーノ、エスクリーノ・マヨールによる兼職が禁止された。同時に、その任期は1年とされ、1年間その職を勤めたものは向こう6年間同職に就けないことが規定された¹⁵⁾。選出方法に関しては、諸教区が年に4教区の割合で順番に4名のフィエル職候補者の選出に当たり、当該教区のオンブレス・ブエノスが同職にふさわしい候補者を2名ずつ選出し、上級官職者がアユンタミエントを通してその内のどちらかを4教区フィエルとして任命すると定められた¹⁶⁾。この任命は、1月20日の聖パブロの日に行われるものとされた¹⁷⁾。任命の際のアユンタミエントの開催は義務付けられており、アユンタミエントが開かれないうちには教区がフィエル職を任命することができた¹⁸⁾。

4教区フィエル職は、度量衡の監視と市場価格（とくにブドウ酒と魚）の統制、円滑な市場機能の保持を主な職務とした¹⁹⁾。彼らは独自の会館 Cámara de los Fieles を開設し、そこに集会した。そこには、ブルゴス市の度量衡原器が保管され、商人達は商売で使う計量器や物差しを原器と照合

しなければならなかった。この際の手数料がフィエルの収入となった²⁰⁾。度量衡原器と帳簿類は毎年、次のフィエルに受け継がれることになっていた。この4教区フィエル職による職権濫用はしばしば見られ、その問題を専門に裁くためにフィエル裁判官 *jueces de los fieles* が置かれた。

4教区フィエルの他にも、26教区フィエルと国王収入フィエルが存在した。前者は4教区フィエル職と性格は似ていたが、教区が任命権を持っていた。彼らは、ブルゴス市の所有する牧草地や牧草、ブドウ畑や穀物畑の管理、保護、ならびによそ者や他者の所有する家畜の侵入の排除といった主に農村部における職務を果していた。近郊のラス・ウエルガス修道院やオスピタル・デル・レイ施療院といった家畜の所有者との訴訟が絶えず、これらもフィエル裁判官の手で裁かれた²¹⁾。

国王収入フィエル職はアユンタミエントが任命権を有しており、任期は1年で、当該国王収入の徴収を職務とした。市会は国王収入フィエルを通して、国王収税官と徴税請負人の仲介者の役割を果たした。様々な国王収入のそれぞれに数人のフィエルが任命されたので、その人数は非常に多く、また一定でもなかった。

C) マヨルドモ

ブルゴス市の収入と支出を管理し、市の財政業務の全責任を担っていたマヨルドモ職の任命や任期、兼務に関する規定は、カストロ伯の『仲裁判決』以前には見られなかった。カストロ伯の『仲裁判決』によって、マヨルドモ職の任期は1年とされ²²⁾、上級官職者の兼職は禁止された²³⁾。その任命方法は、毎年1つの教区が順番に2名の候補者を選出し、アユンタミエントがその内の1名をマヨルドモに任命するという形式をとっていた²⁴⁾。任命は1月1日付けでなされ²⁵⁾、その日までに教区が候補者を選出しない場合は、アユンタミエントが自分達以外からマヨルドモ職にふさわしい人物を任命することができると規定された²⁶⁾。また、上級官職者は、教区からの2名の候補者からマヨルドモを任命する際にアユンタミエントを開催する義務を負い、開催しない場合は教区にマヨルドモの任命権が生じると定められた²⁷⁾。マヨルドモ職に就くためには、単にブルゴス市民権を有するオンブレス・ブエノスであるだけでなく、『善良で富裕な人物』という条件を満たさなければならなかった²⁸⁾。この事実は重要である。なぜならば、上級官職者による兼職は禁止されていたものの、この条件によってマヨルドモ職がブルゴス市の少数支配者層の家系に委ねられることが決定的になったと考えられるからである²⁹⁾。事実、マヨルドモは就任に際して多額の現金を保証金として設けねばならず、そこからエスクリバーノ・マヨールもしくはその代理の公証人による支払命令書に従って滞りなく決済することが義務付けられた³⁰⁾。また、俸給に関しては、従来のマヨルドモと同額のものが市から支払われると規定され³¹⁾、自らが行う決済に際していかなる収入を得ることもできなかった³¹⁾。

マヨルドモの具体的な財政義務とは、市の財貨の保管、市収入(罰金等を含む)の受領、担保物件の押収、諸経費の決済、徴税請負人からの保証金の確保などであった³³⁾。また、アユンタミエントに対して収支決算報告をする義務を負い、アユンタミエントに選出されたコンタドールによる監

査を受けた³⁴⁾。不正を行い収支がマイナスの場合には、個人的にその赤字分を穴埋めしなければならず、その支払いが不可能な場合は投獄された³⁵⁾。

D) プロクラドル

プロクラドルと称されるものには様々な種類がある。各教区から2名ずつ任命されるプロクラドルは、小プロクラドルと呼ばれ、市民総会における教区の一般市民の意見や利害の代表者であった。そして、彼らの中からアユンタミエントに対して一般市民の意見や利害を代表すべく選出された2名は大プロクラドルと呼ばれ、アユンタミエントの会議に立ち会うことができた。大プロクラドルは、市民一個人の権利の擁護から市民生活全体に関わる物価や裁判の問題、市の財産の維持や所領の購入に至るまでの極めて広範囲の問題を扱った³⁶⁾。この大プロクラドルを通してブルゴス市の一般市民が抱く都市行政に対する非難や抗議がアユンタミエントにもたらされるわけであるから、しばしば大プロクラドルがアユンタミエントの上級官職者との論争の立て役者になるのも当然であった。前述した1425-26年の事件の後、カストロ伯は『仲裁判決』の中でプロクラドル職の再編を試み、主に大プロクラドルの任期や任命方法に関して言及した。

『仲裁判決』によって、プロクラドルの人数は2名³⁷⁾、任期は1年とされ、アユンタミエントではなく教区の一般市民がそれを任命するものと規定された³⁸⁾。また、任命は1月1日付けで行われ、それまでに教区が誰をも任命できない場合はアユンタミエントがその任命権を得るとされた³⁹⁾。また、従来通りのプロクラドルの権能が確認されたうえに⁴⁰⁾、プロクラドルは、国王への奉仕や市の利益をよく考慮したうえで、アユンタミエントによる諸行政が不適切である判断される場合にはその旨を上級官職者に申し出る権利を有するとされた。同時に、その申し出の内容証明をエスクリバーノ・マヨールやその代理の公証人もしくは市の一般公証人から得ることができるとされた⁴¹⁾。俸給に関しては、従来通りの額を市から受けると定められた⁴²⁾。

上述の大小プロクラドルの他に、アユンタミエントが任命する特別なプロクラドルが存在した。『改革勅令』と『仲裁判決』の両史料の中でマンダデーロと称されているものである。マンダデーロは必要に応じて宮廷やその他の場所に派遣され、ブルゴス市の利益を代表すると共に、それを保護する義務を負った。宮廷派遣プロクラドルやコルテス派遣プロクラドルもマンダデーロの範疇に入る。このマンダデーロ任命権は、1345年の『改革勅令』でアユンタミエントに賦与され、1426年の『仲裁判決』もこれに沿う形で、アユンタミエントが上級官職者か一般市民かを問わず王国への奉仕と市の利益を保護するにふさわしい人物を任命すべきであるとした⁴³⁾。

宮廷派遣プロクラドルは、アユンタミエントによって任命され、宮廷内において、宮廷とブルゴス市との間に生じた訴訟や宮廷との交渉に際し常にブルゴス市の利害を代表した。市から俸給を受け、その額はアユンタミエントが定めた日給を基礎として任務遂行期間分とされた⁴⁴⁾。

コルテス派遣プロクラドルも『改革勅令』以降、その任命権はアユンタミエントに委ねられた。その人数は元来フェロやその他の特権で定められていたが⁴⁵⁾、実際には、都市の都合や他の状況に

よって様々であった⁴⁶⁾。俸給は市財政から賄われていたが、そのための支出は市財政にとってかなりの負担であり、1411年には、レヒドールの1人ディエゴ・ゴンサレス・デ・メディーナが、プロクラドル派遣に要する多額の出費を抑えるために人数を2名、期間を2か月、俸給は3000マラベディーとするようアユンタミエントに提言している程である⁴⁷⁾。彼らはコルテスが閉会した後も国王の下に留まる傾向にあり、結果として市の財政支出はますます増加した。また、彼らが宮廷に留まることから、しばしば宮廷派遣プロクラドルと混同された⁴⁸⁾。彼らは、国王から特権や恩寵、贈物を受け取ることを禁じられており、その禁を犯した場合には《背信》もしくは《偽誓》の罪で罰せられることになっていた⁴⁹⁾。

以下では、カストロ伯の『仲裁判決』には触れられなかったブルゴス市の下級官職の幾つかを簡潔に紹介する。もっとも、史料の関係上、職務や俸給に関する明白な事実が判らないものが殆どであることを断わっておく。

E) コレドール

アユンタミエントによって任命される官職で、ブルゴス市の様々な商業活動に仲立ち人として介入した。コレドールには多くの種類があった。商品コレドール *corredor de cambio y mercadería* は6名で、あらゆる商品の交換や売買に関与し、商品の保証と価格の証明を職務とした。その仲立ち手数料は商品1000個当たり1レアル（3マラベディー）であった。衣類コレドール *corredor de cuello* は2名で、衣服の売買に介入した。仲立ち手数料は商品コレドールの場合と同じであった。荷役コレドール *corredor de cargas* は4名で、職務は商品の輸送に必要な荷車や牛馬の幹旋を行うことであった。その手数料は一回の幹旋につき4マラベディーであった。家畜コレドール *corredor de cuatroepea* は家畜の売買を仲立ちし、家畜1000頭につき15マラベディーの手数料を得た。食糧コレドール *corredor de haber de peso* は6名で、市場や旅籠屋に持ち込まれる食糧の管理を職務とした。旅籠主や店舗主およびその家族はこの職に就くことはできなかった。その手数料は食糧の種類によって異なっていた。他にも、不動産売買を仲立ちする不動産コレドール *corredor de heredades* や果実の売買を仲立ちする果実コレドール *corredor de fruta* 等が存在した⁵⁰⁾。各々のコレドールは、当該分野以外でのコレドールとしての権限を有さず、自分が関与した商品の売買契約に参加することを禁じられていた⁵¹⁾。定められた額以上の手数料を受け取った場合は、罷免され、600マラベディーの罰金を支払わなければならなかった⁵²⁾。

F) レトラード

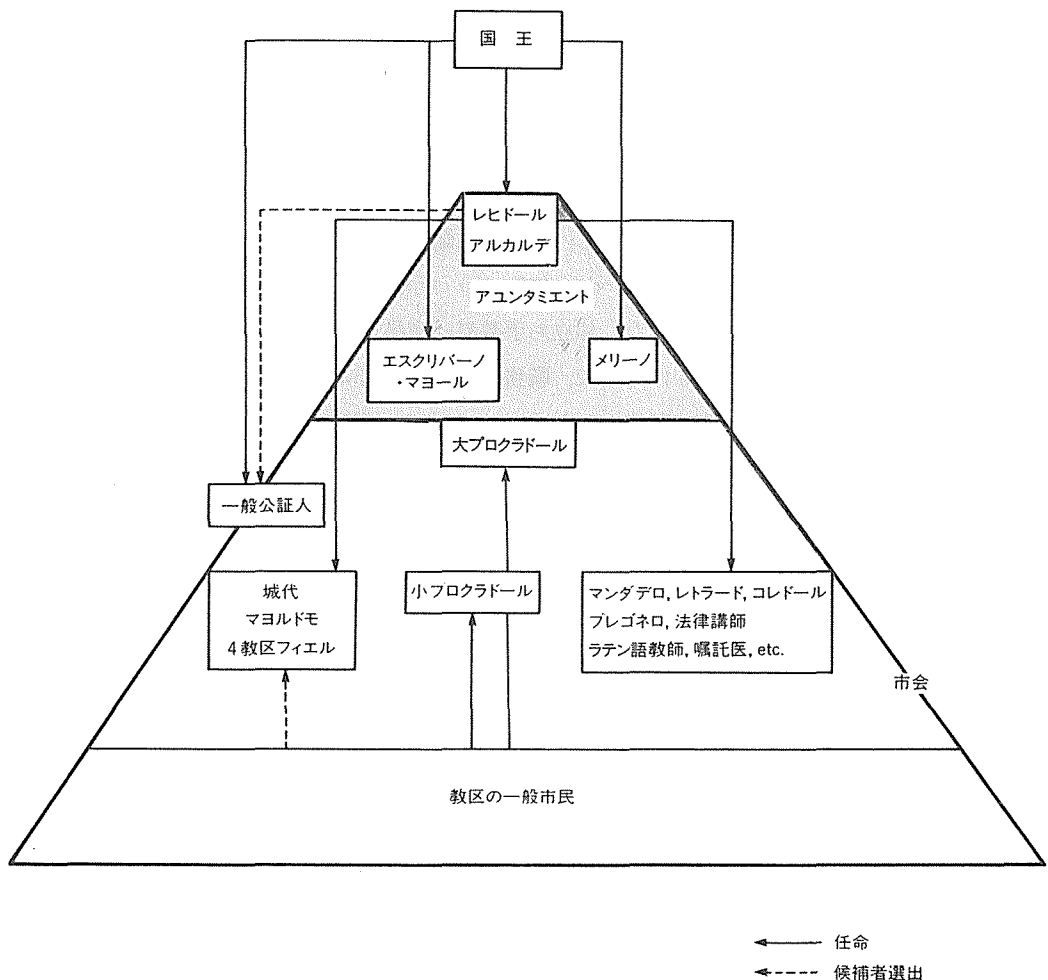
市会に奉仕する法律の専門家で、ブルゴス市が抱える訴訟に関して、上級官職物やプロクラドルに助言したり答申したりする役目を負った。人数は不定で必要に応じて増減した。俸給は市会から出され、通常は年1000マラベディーであった⁵³⁾。

G) 法律講師

ブルゴス市では、国王に賦与された特権により法律講座の開講が許可されていた。その講師の俸給は年に4000マラベディーで、王室財政から賄われた⁵⁴⁾。この講座はもっぱらブルゴス市の少数支配者層の子弟のためのものであった⁵⁵⁾。

H) ラテン語教師

ラテン語教師が市から得る年俸は1000マラベディー、助教師の年俸は200マラベディーであった⁵⁶⁾。



カストロ伯の『仲裁判決』によるブルゴス市の官職図

I) プレゴネロ

市会の召集, 決議事項の布令, 競売の告示など, 市の広報一般に関する職務を負った。人数は6名で⁵⁷⁾, 市から得る俸給は年に100マラベディーであった⁵⁸⁾。

これらの他にも, 市の囑託医師やマヨルドモの行う会計の監査を行うコンタドール⁵⁹⁾, 首切り役人(年俸100マラベディー)⁶⁰⁾, 犯罪の調査にあたるベスキンドール(任期は1年)⁶¹⁾, 市の食糧供給やその他の経済的サービスの監視を行うベエドール⁶²⁾などの官職があった。

(注)

- 1) Carlos Estepa Díez y otros, *Burgos en la Edad Media*, Valladolid, 1984, p. 402 および J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 108 を参照。
- 2) “Sentencia Arbitraria otorgada por Don Diego Gómez de Sandoval, Adelantado Mayor de Castilla, en el conflicto entre el Concejo de Burgos, por un lado, y las collaciones de la ciudad, por otro”, A. M. B., Sec. Hca., n. 1411, cit por *Ibid.*, pp. 168-174, Apéndice Documental 14. カストロ伯はカステリーリャ地方長官 Adelantado Mayor de Castilla の職にあり, 当該管区の中の王領地に関する訴訟の控訴審を裁く立場にあった。
- 3) 『判決第1』 “...mando que sean annales las dichas alcaldías...”
- 4) 『判決第1』 “...e que se den en cada un anno a veçinos de la dicha çibdad, ...tales que sean personas pertenescientes para aver las dichas alcaldías;...”
- 5) 『判決第1』 “...e que no puedan aver las dichas alcaldías ni alguna de ellas los dichos regidores ni alcalldes ni el escriuano ni otros oficiales de la dicha çibdad para sus personas;...” 『仲裁判決』以前は, ブルゴス市の上級官職者が城代職に就いていた。J. A. Bonachía, *El señorío de Burgos...*, p. 79.
- 6) 『判決第10』 “...los vecinos de la colación a quien competen las dichas alcaydías o alguna de ellas nonbre dos personas buenas suficientes para cada una alcaydia; e esto que lo repartan por las colaciones segund que los omes buenos de las dichas colaciones que las han de aver plogiese, poniendo tres o quatro colaciones en el primero anno, otros tantos en el segundo, otros tantos en el terçero por la manera que lo ellos hordenaren fasta que sean conplidas, ygaladas en los dichos oficiales todas las dichas colaciones de la çibdad, ...”
- 7) 『判決第16』 “...e que nonbren e escojeran las tales personas, sin rruego e ynduzimiento de los tales oficiales ni de otra persona alguna, e que solamente abran consyderaçon al provecho de la dicha çibdad e no a otra persona alguna, ...”
- 8) 『判決第14』 “...mando que los dichos oficiales sean tenudos a llamar o fazer concejo quando las dichas colaciones o qualquier de ellas quisiere o obiuiueren (sic) a nonbrar las dichas personas para los dichos ofícios de alcaydías e fieldades e mayordomia e procuradores e cada una de ellas; e si no quesieren llamar e ayuntarse para ello, siendo rrequeridos, que las dichas colaciones o qualquier de ellas puedan nonbrar e nonbren las dichas personas...”
- 9) 『判決第15』 “...e si para los dichos dias no dieren las dichas personas nonbradas para los dichos ofícios en cada uno de ellos, que los dichos oficiales o alcalldes o merino e regidores con el escriuano puedan dar los dichos ofícios a las personas que ellos entendieren que sean vecinos de la dicha çiudad, e que non sean de los mismos, contando que sean buenas personas pertenescientes para los dichos ofícios de alcaydías e mayordomazgo e purocuradores.”
- 10) 『判決第15』 “...en esta manera para el dia de anno nuebo de cada un anno para las alcaydías e mayordomias e procuradores, e para el dia de San Pablo, que es en veynte dias del mes de henero e para las dichas

fieldades;...”

- 11) 『判決第1』 “... e que aquel o aquellos que obieren la dicha alcaaldia un anno que no las quedan aver ni ayan dende a seys annos primeros siguientes;...”
- 12) 『判決第1』 “...mando que los alcaaldes e regidores e merino den entre dos buenas personas, e los dichos vezinos e moradores de la dicha çibdad den otros dos entre sy, para que estos quatro tasen lo que razonablemente se deue dar en cada un anno con las dichas alcaaldias e con cada una de ellas;...”
- 13) 『判決第1』 “... e lo que mas rrendieren las dichas alcaaldias o cada una de ellas que sean para los propios de la dicha çibdad e para sus nesçesydades;...”
- 14) J. G. Sainz de Barranda, *El concejo de Burgos...*, II, p. 126, “... e otro sy que ellos (los jurados) recudan al concejo e quando el concejo oviere de poner fieles de los quatro e de los veinte e seis que los fagan ellos con el concejo aquellos que las vecindades dieren, asi como fue de uso e costumbre e non por mandamiento de alcaaldes...”
- 15) 『判決第2』 “... que sean buanas personas pertenesçientes para los dichos ofiçios, e que los dichos ofiçios de fialdades o alguno de ellos que los non ayan agora, nin de aqui adelante, los dichos regidores nin alcaaldes e merino e escriuano ni alguno de ellos por sus personas; e que estos dichos ofiçios e cada uno de ellos que sean annales e dende cada anno; e aquel o aquellos que tuuieren un anno los dichos ofiçios o alguno de ellos, que non los ayan, nin puedan aver, fasta seis annos primeros syguientes.”
- 16) 『判決第11』 “... mando que para cada una de ellas nonbren los omes buenos de las colaçiones a quien conpeten las dichas fieldades o alguna de las dos personas buenas sufisçientes para cada una fieldad, ... Esto que lo repartan por las colaçiones, segund en la manera sobredicha de las alcaaydias, e que los ofiçiales escojan de las dichas dos personas una persona para fiel, en manera que escojan quatro fieles, ...” 該当教区は、城代職の選出の場合と同様の方法で決められた。『判決第10』、本稿第2章、城代職の注6)を参照。
- 17) 『判決第15』、本稿第2章、城代職の注10)を参照。
- 18) 『判決第14』、本稿第2章、城代職の注8)を参照。
- 19) セビーリャ市のフィエル職の職務に関しては、R. Carande, “Sevilla, fortaleza y mercado: Algunas instituciones de la ciudad en el siglo XIV especialmente, estudiadas en sus privilegios, ordenamientos y cuentas” en *Anuario de Historia del Derecho Español*, II, 1925, p. 323 を参照。
- 20) 1427年、全ての織物業者は、物差しや計量器の照合を命ぜられ、照合1件につきそれぞれ1マラベディ－を支払わなければならなかった。A.M.B., L. de A. de 1427, F. 103, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 100.
- 21) 訴訟の際には、それぞれが代表者を2名ずつ立てて訴訟の解決に当たるのが常であった。A.M.B., L. de A. de 1427, F. 73, cit. por *ibid.*, p. 103.
- 22) 『判決第5』 “... fallo que la dicha mayordomia debe ser annal, ...”
- 23) 『判決第5』 “... e que alguno de los alcaaldes e regidores e merino e escriuano que la (mayordomia) no ayan para sus personas.”
- 24) 『判決第12』 “...mando que nonbren los veçinos de la dicha çiudad dos personas buenas abonadas sufisçientes para la dicha mayordomia, e esto que lo rrepartan por colaçiones, segund en la manera susodicha, e que los ofiçiales e alcaaldes e merino e regidores con el escribano mayor, o con su lugarteniente, sean tenudos de escojer e escojan de las dichas personas uno de ellos para el dicho ofiçio de mayordomo, ...”
- 25) 『判決第15』、本稿第2章、城代職の注13)を参照。
- 26) 『判決第15』、本稿第2章、城代職の注9)を参照。
- 27) 『判決第14』、本稿第2章、城代職の注8)を参照。
- 28) 『判決第12』, “...mando que nonbren los veçinos de la dicha çiudad dos personas buenas abonadas sufisçientes para la dicha mayordomia, ...” および『判決第5』 “... tener alguna buena persona e llena e abonada de los omes buenos veçinos e moradores de la dicha çiudad, e no sean de los dichos ofiçiales. ...” を

参照。

- 29) ヒベルトによれば、都市のマヨルドモ職の保有者はほとんどの場合、平民騎士層に属していたと言う。R. Gibert, *El concejo de Madrid*..., p. 242.
- 30) 『判決第12』, "...e el que asy fuere escogido para el dicho oficio de buenos fiadores llanos e abonados, que el dara buena quanta leal e verdadera a los dichos oficiales de todo el mayordomia, e que a este tal mayordomo recudan todos los mrs. de la dicha mayordomia e aquellas personas e en aquellos lugares e casas que los dichos oficiales mandaren por sus libramientos, librados del escribano mayor o de su lugarteniente,..."
- 31) 『判決第12』, "...e mando que este mayordomo aya de la dicha ciudad el salario que syenpre dio e fue dado a los otros mayordomos que fasta aqui an sido de la dicha ciudad."
- 32) 1426年には、決済を行うごとに13マラベディーを手数料として取っていたマヨルドモが処罰されている。A.M.B., L. de A. de 1426, F. 1. cit por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., p. 105.
- 33) J. García Sainz de Barranda, *La ciudad de Burgos*..., p. 137, および A.M.B., L. de A. de 1426, F. 1; A.M.B., L. de A. de 1427, F. 78. cit por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., p. 106.
- 34) このコンタドールは、アユンタミエントの構成員、通常はレヒドールの中から選出された。C. Estepa Díez y otros, *Burgos en la Edad Media*, Valladolid, 1984, p. 401. および A.M.B., L. de A. de 1411, F. 9; A.M.B., L. de A. de 1427, F. 71. cit por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., p. 106.
- 35) A.M.B., L. de A. de 1427, F. 82. cit por *ibid.*, p. 106.
- 36) *Ibid.*, p. 107.
- 37) 『判決第7』, "...que aya de aqui adelante en la dicha ciudad dos procuradores de la dicha ciudad,..."
- 38) 『判決第13』, "...los susodichos dos procuradores que han de ser de la dicha cibdad, mando que los nonbren los veñinos de la cibdad..."
- 39) 『判決第15』, 本稿第2章、城代職の注10) を参照。
- 40) 『判決第7』 "...a los quales procuradores e a cada uno de ellos sea dado e otorgado en cada un anno un poder que se acostunbro de dar e otorgar a los otros procuradores de la dicha ciudad que hagara son o suelen ser."
- 41) 『判決第7』 "...le sea dado poder conplido para que, sy estos tales procuradores o qualquier de ellos entendieren que cunple a seruicio del rey e al bien e prouecho de la dicha ciudad que algunas cosas de ellas que se ordenaren no se deben asi hordenar, e que sy entendieren que los dichos oficiales deben hordenar algunas cosas e fazer de nuevo para reparar algunos edificios o que deben fazer e castigar algunos fechos o remediarse en las otras qualquier cosas que entendieren que cunple a la dicha cibdad e al bien probecho, que requieran e puedan requerir sobre ello a los dichos ofiales e tomar testimonio de ello por ante el escribano mayor o el lugarteniente o ante otro escribano qualquier de la dicha cibdad."
- 42) 『判決第13』, "Estos dichos dos procuradores ayan sus salarios acostunbrados." 因に、1379年の大ブロクラドールの俸給は300マラベディー、1398年には500マラベディー、1411年から1429年の間は1000マラベディーであった。A.M.B., L. de A. de 1379, F. 51; A.M.B., L. de A. de 1398, F. 41; A.M.B., L. de A. de 1411, F. 23; A.M.B., L. de A. de 1426, F. 18; A.M.B., L. de A. de 1427, F. 85; A.M.B., L. de A. de 1429, F. 35, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., p. 109.
- 43) 『判決第6』 "Fallo que los dichos oficiales puedan e deven escojer segund la hordenança que fue dada a la dicha ciudad por donde se regiese la dicha ciudad e los dichos mandaderos los que entendieren que cunplen al seruicio del rey e a probecho de la dicha ciudad quales mas les pluguiese e entendieren que cunplen e fueren pertenesçientes, asy de entre sy como de los dichos omes buenos veñinos de la dicha ciudad."
- 44) 因に、1411年時点の俸給は、1日当たり25マラベディーで、2か月間支払われた。A.M.B., L. de A. de 1411, F. 46, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos*..., p. 110.
- 45) ブルゴス、トレド、レオン、グラナダ、セビーリャ、コルドバ、ムルシア、ハエン、サモラ、バリャドリッド、サラマンカ、アビラ、セゴビア、マドリッド、グアダラハラ、クエンカ、トロの諸都市が派遣できる

- プロクラドールの人数は2名であった。J. García Sainz de Barranda, *La ciudad de Burgos...*, II, p. 146.
- 46) 1379年には8名, 1388年には2名, 1392年には4名, 1411年には4名のプロクラドールがブルゴス市からコルテスに派遣されている。J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 110. および L. García de Valdeavellano, *Curso de Historia de las Instituciones españolas. De los orígenes al final de la Edad Media*, Madrid, 1973, p. 474. を参照。
- 47) J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 111. コルテス派遣プロクラドールに要する費用の増加に関しては, *ibíd.*, pp. 111-112 を参照。
- 48) *Ibíd.*, p. 110.
- 49) J. García Sainz de Barranda, *La ciudad de Burgos...*, II, pp. 146-147.
- 50) コレドールの詳細に関しては, *ibíd.*, II, pp. 343-348 を参照。
- 51) A. M. B., L. de A. de 1379, F. 98; A. M. B., L. de A. de 1398, F. 91, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 98.
- 52) A. M. B., L. de A. de 1379, F. 98; A. M. B., L. de A. de 1411, F. 18, cit por *ibíd.*, p. 98.
- 53) A. M. B., L. de A. de 1411, fs. 23 y 26; A. M. B., L. de A. de 1426, F. 8, cit. por *ibíd.*, p. 114.
- 54) A. M. B., Sec. Hca., n. 2978, cit. por *ibíd.*, p. 117.
- 55) A. M. B., Sec. Hca., n. 678, cit. por *ibíd.*, p. 118.
- 56) A. M. B., L. de A. de 1388, F. 9; A. M. B., L. de A. de 1398, F. 19, cit. por *ibíd.*, p. 119.
- 57) J. García Sainz de Barranda, *La ciudad de Burgos...*, II, p. 148.
- 58) A. M. B., L. de A. de 1427, Fs. 97 y 116; A. M. B., L. de A. de 1429, F. 29; A. M. B., L. de A. de 1430, F. 125, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 119.
- 59) 本稿第2章, マヨルドモの項, 注34) 参照。ガルシア・サインス・デ・バランダは, 教区の一般市民にコンタドールの任命権があったと言う。J. García Sainz de Barranda, *La ciudad de Burgos...*, II, p. 139.
- 60) A. M. B., L. de A. de 1429, F. 22, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 120.
- 61) A. M. B., L. de A. de 1398, F. 25, cit. por *ibíd.*, p. 120. 彼らはエスクリバーノ・マヨールもしくはその代理を勤める2名の公証人と共に行動した。
- 62) M. González Jiménez, *El concejo de Carmona a fines de la Edad Media (1464-1523)*, Sevilla, 1973, p. 171.

4. まとめにかえて——『仲裁判決』の限界——

カストロ伯の『仲裁判決』には, 前章で取り上げた都市下級官職の任期や俸給, 任命方法などに関する判決の他に, 教区の一般市民の諸要求に対する解答や上級官職者の不正行為や職権濫用等に関する判決も見られたことは既に述べた。それらによって如実に反映される上級官職者の市政における実態の具体例としては次のようなものが挙げられる。

この1つは, 上級官職者が, アルフォンソ11世の『改革勅令』の定足数に関する規定を無視してアユンタミエントを開催していたことである。カストロ伯はこの事実に対し『判決第8』で『改革勅令』の規定を遵守するよう命じている¹⁾。また, 上級官職者による公費の濫用や市有財産の譲渡も告発された。前者に関しては, 事実関係の確認ができずに判決が保留されたものの²⁾, 後者に関しては, 譲渡された市有財産ならびにその受領者の調査と譲渡された市有財産の即時回収が命じられた³⁾。さらに, アルカルデの職務怠慢に関する告発も多く見られた。『判決第19』によると, アルカルデはブルゴス市内にいるにもかかわらず公判, とくに民事訴訟を代理人に任せていた⁴⁾。そ

して、一般公証人がアルカルデの代理人になる場合が多く、このために公証人の通常の機能に支障が生じたほどであった⁵⁾。また、アルカルデは『改革勅令』で規定された監獄での公判をしばしば怠っていた⁶⁾。

さらに、上記ほど直接的ではないが、上級官職者の不正や横暴の存在を匂わせる命令や表現も幾つか見られる。例えば、城代、4教区フィエル、マヨルドモ等の任命に際して、教区の要請に応じる形でのアユンタミエントの開催を義務付けた『判決第14』⁷⁾や上級官職者の《要請や説得》に左右されない教区による公平な官職候補者の選出を命じた『判決第16』⁸⁾は、一般官職の選出・任命に際する上級官職者による何らかの圧力行為もしくは職権濫用の存在を十分に想定させるものである。また、上級官職者によるマヨルドモの兼職を禁じた『判決第5』の文言には、上級官職者がマヨルドモ職に就いた場合に起こりうる不正の可能性が述べられている⁹⁾。また、『判決第9』に見られる、教区のオンブレス・ブエノス自身によるフラド職就任の要求からも、一般市民の利害が政治に反映されることを求める強い意思とその背後にある上級官職者の市政における横暴や職権濫用の状況が窺える¹⁰⁾。

カストロ伯が上級官職者による不正行為や職権濫用の存在を認識し、それらに歯止めをかけようと試みたことは事実である。しかしながら、その一方で、上級官職者ひいては少数支配者層のブルゴス市政府における機能やその重要性を認識していたことも確かであった。伯は『判決第3』において、ブルゴス市のアルカルデとレヒドールによる属村アルカルデの兼職の合法性を確認し¹¹⁾、『判決第4』では、教区のオンブレス・ブエノスの反対意見に対して、レヒドールによるブルゴス市の印章の保管をその職務の性格上妥当と判断しているのである¹²⁾。

以上のように、第2章からここまで『仲裁判決』の内容を分析してみると、個々の判決内容は、教区の一般市民の権利の擁護を全面に打ち出すものでは決してなかった。『仲裁判決』の本質は、アユンタミエントの有する主要な決定権の少数支配者層による独占に制限を加えることなく、彼らの横暴や職権濫用を可能な限り防止することにあった。この姿勢は、アルフォンソ11世の改革路線に忠実に則ってアユンタミエント体制を堅持するものであり、この点において、カストロ伯の『仲裁判決』は、1345年の『改革勅令』によって法的根拠を与えられたブルゴス少数支配者層の政治的権力を単に制度的に確認したものに過ぎないのである¹³⁾。

カストロ伯の『仲裁判決』が直面した現実は厳しいものであった。ブルゴス市の上級官職者ひいては少数支配者層の市政における勢威は止まるところを知らず、『仲裁判決』の金看板とも言うべき《教区による2名の候補者の選出、アユンタミエントによるその内の1名の任命》という妥協的原則は間もなく彼らの手で形骸化されたのである。その具体例を4教区フィエル職、城代職、マヨルドモ職に見ることができる。

4教区フィエルに関しては、『仲裁判決』が出された5年後の1431年にはもう既にアルカルデ、メリーノとレヒドールの中からくじ引で選出、任命されるようになっていた¹⁴⁾。また、城代職も『仲裁判決』で定められた任命方法と任期に関する規定が遵守されず、1450年頃からカルタヘナ家やフ

リアス家といったブルゴス市の有力平民騎士家系の手中に落ちていった¹⁵⁾。マヨルドモ職に関して、『仲裁判決』で上級官職者の兼職は禁じられていたが、マヨルドモ職の性格上、『善良で富裕な人物』という就任条件が付加されたことにより、事実上一般市民の手から離れて上級官職者の一族、すなわち経済的基盤を有する少数支配者層の手に委ねられることとなった¹⁶⁾。このようにして、上級官職者はブルゴス市政において比較的重要な官職を手中にしていたのである。

コルテス派遣プロクラドール職も上級官職者による官職独占行為の対象となった。この官職の任命に関しては、アルフォンソ11世の『改革勅令』の中でアウンタミエントが『市会から任命する』ものと記されていたが¹⁷⁾、『仲裁判決』では新たに『教区のオンブレス・ブエノスと同様に上級官職者から』の選出も可能であると明記され¹⁸⁾、上級官職者のコルテス派遣プロクラドール職就任の合法性が確認されている。そして、実際にも、『改革勅令』当初から教区の一般市民が同職に任命されることは稀であった。

例えば、1379年に任命されたコルテス派遣プロクラドールは8名で、その内アルカルデ2名、レヒドール1名、宮廷官職者3名、残り2名もブルゴス市の有力家系の出身者であった¹⁹⁾。また、1392年に任命された4名の内訳はアルカルデ2名、エスクリバーノ・マヨールとレヒドール各1名であった²⁰⁾。これらの事実は、14世紀後半～15世紀前半の王権—コルテス—都市の関係を理解するうえで重要である。すなわち、コルテス派遣プロクラドールが王権と提携した都市の少数支配者層²¹⁾の出身であり、同時に、アルフォンソ11世によって創設され、歴代国王によって中央集権の道具として利用されたアウンタミエントの構成員でもあり得たと言う事実を考慮すると、彼らがコルテスの議場において王権の意のままになったと考えることはそう無理なことではない。なぜなら、コルテス派遣プロクラドールは都市全体の利害の代表者ではなく、少数支配者層の利害の代表者であったからである。15世紀のコルテスの衰退はまさにこのような状況の中で生じたのであった²²⁾。

* * * * *

本稿は、14、15世紀のブルゴス市少数支配者層に関する研究の一環として、アルフォンソ11世の『改革勅令』とカストロ伯の『仲裁判決』を中心史料として、ブルゴス市の官職機構と少数支配者層による都市官職の独占をテーマに論を進めてきた。

この時期に都市官職の支配に成功し、ブルゴス市における政治的覇権を獲得した少数支配者層は、市政を通して様々な行動をとった。その行動は少なからずブルゴス社会に影響を及ぼすものであった。例えば、バルドスが指摘するように、『一般消費』にかぶさる間接税（バッラ税、ポルタスゴ税やシサ税）の重視といった少数支配者層による財政制度の操作は、担税者の経済的負担となった²³⁾。また、カサードが指摘している少数支配者層による地所の購入²⁴⁾は、少数支配者層の封建社会内部での役割に関わる問題である。そのうえ、ブルゴス市会の行使する領主的支配権を通して彼らが維持していた市の所領は、ブルゴス商人の収入源とも言える羊毛商業にとって重要な地域に広がっていたと言う事実は、市の所領の維持と少数支配者層の商業的利益が一体化していたことを示

している²⁵⁾。これは、ブルゴス市の都市と農村の問題を内包するものである。

このような少数支配者層による権力の行使形態の分析は、中世後期のブルゴス市の研究の重要なテーマの1つであり、市政体の財政機能、商業活動の発展と商業資本、都市への食糧供給と市場統制、集团的裁判権領主としての都市の機能等の諸問題と絡み合わせて総合的に研究されなければならない。

(注)

- 1) 『判決第8』“...en rrazon de lo que dizen los dichos honbres buenos que los regidores hordenan algunas cosas syn el numero de los regidores e ofiçiales que se contiene por la hordenança del dicho sennor rey, ... fallo que se deben guardar en lo quentenido en la dicha hordenança e que no se faga cosa alguna sy el dicho numero de ofiçiales, ...” 定足数に関しては、本稿第1章、注8) 参照。
- 2) 『判決第17』“...en rrazon de los mres. de lo propios que dizen los dichos omes buenos que fueron malgastados por los dichos ofiçiales, e por quanto al presente yo no lo podria determinar syn aver en ello alguna ynformaçion, rreçibolo en mi para lo pronunçar en el tiempo del alargamiento e prorrogacion del dicho compromiso;...”
- 3) 『判決第18』“...por quanto por parte de los dichos onbres buenos se dize que estan muchas cosas enajenadas de los propios del conçejo de la dicha çudad, mando que. . . se ynforme e sepan luego la verdad, quales son e quien las tiene, y pongan luego en execucion de las demandar, e fagan luego todo su poderio porque sean traídas e encorporadas con los propios del dicho conçejo.”
- 4) 『判決第19』“...a lo que dizen por parte de los buenos omes de la dicha çibdad que syenpre fue en costunbre e a sydo saluo de poco tiempo aca que se quebranta, que los alcalldes de la dicha çudad, en quanto estubiesen en ella, libreban e oyan e debian librar e oyr por sus personas los pleytos asi çebiles como criminales, e no por tenientes lugares suyos, lo qual dizen que no guardan, especialmente en los pleytos çebiles en que ponen sus logarestenientes para que libren, estando ellos en la çudad...” カストロ伯は、不在の場合や国王の許可のある場合、病気の場合を除いてアルカルデは代理人を起用できないとした。
- 5) 『判決第20』“...dize que por parte de los dichos buenos omes que los alcalldes ponen por los sus logarestenientes en los ofiços algunas personas de los escribanos del numero de la dicha çibdad los quales en su juyzio de la dicha çibdad, asy por estar ellos ocupados en los dichos ofiços e no los poder aver por las cosas que son nesçesaryas como por otras razones que en esta razon dixeran...” カストロ伯は、一般公証人が通常の機能を果たすべく、アルカルデが彼らを代理人にすること禁止するよう命じている。
- 6) 『判決第21』“...a lo que dizen que los alcalldes de la dicha çudad, que aunque estan en la çudad no entran audiencia de carçel los dichos dias que estan asignados por la dicha hordenança, de lo qual recreçe grand dampno de los fechos criminales, ...” カストロ伯はアルカルデに対して『改革勅令』の遵守を命じている。
- 7) 本稿第2章、注8) 参照。
- 8) 本稿第2章、注7) 参照。
- 9) 『判決第5』“...asy porque el tal veçino no se atreua a tomar los mres. del dicho conçejo, como se podria atreuer alguno que lo tobiere de los alcalldes e regidores e escriuano, como por quanto al tal sera mas ayna tomado cuenta por los dichos alcalldes e regidores e alcalldes e merino e escriuano sy fuese mayordomo, o porque sy algunos mres. en el tal mayordomo quedaren podrian ser mas ayna cobrados e apremiados por los dichos ofiçiales que lo pague que no sy fuese alguno de ellos...”
- 10) 『判決第9』“...a lo que los dichos buenos omes demandan que les sean dados jurados...”

- 11) 『判決第3』 “...por quanto antyguamente an acostunbrado los dichos alcalldes e regidores de husar de los dichos ofiços de alcalldias por personas de entre ellos...mando que los tengan e los den a quien adelante, segund e por la forma que fasta aqui lo an husado e acostunbrado de los tener e dar.”
- 12) 『判決第4』 “...mando que los dichos regidores, e alcalldes, e merino con el escriuano mayor de cada un anno a una buen persona, que sea fiel, que lo (el sello de la çibdad) tenga, e que lo escojan e puedan escojer los dichos ofiçiales de entre sy mesmos, especialmente de entre los regidores, que lo den de cada un anno;...”
- 13) J. A. Bonachía, “Algunas cuestiones en torno al estudio de la sociedad bajomedieval burgalesa”, *La ciudad de Burgos. Actas del Congreso de Historia de Burgos*, 1985, León, p. 73.
- 14) A.M.B., L. de A. de 1431, F. 110, cit. por J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 100.
- 15) 1450年頃にはブルゴス市の有力平民騎士家系の1つであるカルタヘナ家がララ城代職を独占するに至っていた。また、ムニョー城代職はフェルナド・ベレス・デ・ブルゴス（ブルゴス家）やフワン・デ・フリ阿斯（フリ阿斯家）を経てサンチョ・デ・ロハス家の占めるところとなった。J. A. Bonachía, *El señorío de Burgos...*, p. 81 を参照。
- 16) 本稿第2章，マヨルドモの項を参照。
- 17) 本稿第1章，注19）参照。
- 18) 本稿第2章，注8）参照。
- 19) J. A. Bonachía, *El concejo de Burgos...*, p. 113.
- 20) J. Valdeón Baroque, “Las Cortes Castellanas en el siglo XIV”, *Anuario de Estudios Medievales*, 7, Barcelona, 1970-71, p. 638.
- 21) ブルゴス市の少数支配者層と王権の提携に関しては，拙稿，『ブルゴス市寡頭支配者層の成立と王権』，pp. 57-84 を参照。
- 22) バルデオンは，コルテスはフワン2世（1406-1454）の統治期には既に前世紀の力を失い，都市特別献金の単なる徴収の場と化したとさえ言う。J. Valdeón Baroque, “Las Cortes de Castilla y las luchas políticas del siglo XV (1419-1430)”, *Anuario de Estudios Medievales*, 3, Barcelona, 1959. p. 298. また，彼は近年，14世紀後半～15世紀初頭に至る期間のコルテスの内部的変化を，カスティーリヤ王国の政治，社会，経済面から説明しようと試みている。J. Valdeón, “Las Cortes de Castilla y León en tiempos de Pedro I y de los primeros Trastámaras (1350-1406)”, *Las Cortes de Castilla y León en la Edad Media*, I, Valladolid, 1988, pp. 183-217. 都市内部の社会的変化とコルテスとの関連については，J. María Mínguez, “La transformación social de las ciudades y las Cortes de Castilla y León”, *Las Cortes de Castilla y León en la Edad Media*, II, pp. 13-43 を参照。
- 23) J. A. Pardos, “La renta de ‘Alcabala vieja, Portazgo y Barra...’ del Concejo de Burgos durante el siglo XV (1429-1503)” en *Historia de la Hacienda Española (Epocas antigua y medieval)*, Madrid, 1982, pp. 674-676.
- 24) H. Casado, “La propiedad rural de la oligarquía burgalesa en el siglo XV”, *La ciudad hispánica durante los siglos XIII al XVI*, I, Madrid, 1985, pp. 581-596.
- 25) J. A. Bonachía, “Algunas cuestiones en torno...”, pp. 75-76.